



芭蕉句選拾遺成

百韻細評

東海林主

特別
A5
6590
101



八五
6590
101

百韻細評



月トの取リ以リ一一細細寒寒をを引引

菊菊のの枝枝のの細細くくももははぬぬくくハハああららずず
ふふもも以以牙牙のの二二字字をを引引れれハハ成成念念

湖湖有有くくをを引引くく一一ははくく一一馬馬道道

廿七廿七夜夜のの曉曉をを人人知知不不言言人人のの江江果果然然とといいふふ

春春のの芳芳山山ににほほるるのの影影りりれれくく

花の匂をよしの香りにしる日くおの曉の
お花の匂にまじりし人の心は海と紫
花の匂にまじりし人の心は海と紫
より海人の心と化すを

お花の匂に見出し花の匂に

花の匂をよしの香りにしる日くおの曉の
お花の匂にまじりし人の心は海と紫
花の匂にまじりし人の心は海と紫
より海人の心と化すを

お花の匂に見出し花の匂に

花の匂をよしの香りにしる日くおの曉の

お花の匂に見出し花の匂に

花の匂をよしの香りにしる日くおの曉の

お花の匂に見出し花の匂に

花の匂をよしの香りにしる日くおの曉の
お花の匂にまじりし人の心は海と紫
花の匂にまじりし人の心は海と紫
より海人の心と化すを

お前のひとを祀りてんへきやん
こひまのつら

清くいささへしとる者屋

産みしとてふらして者お田舎りた
及りてふしとてふらして海に

○
お前醫者よふらしてふらして書教

産みしとてふらしてふらして田舎りた

名とくく又春無持く来る

醫者よふらしてふらしてお前のひと
とてふらして

暖簾よふらして首のつらく笑ひよ

口のやうな女をよふらして笑ひよ
首のつらのふらして

口をいさへしとる者屋

お前のひとを祀りてんへきやん

女房を登りし澄く衣張

お向の意しなりや

咄と度し廊乃附花を

女房の目お思ふは廊と及んじ
是は暖屋の嫁と見えたり

茶とおめく入るはこの西

附心ぬきふじに

併給乃外しし給しと借留

前し給ぬめむぬく

登へともろとく軍備て出る

前し軍のおおき

派膚と存中し附し後大工

借も人のこむらりしを場り付て

是をくみんとて業し入

色んん着と楓を産所

搜すに後く

板乃尚と埋る言く 加せ

清一白紙

抱ふくまこと取くばり籠

板の弓の物り道ふ 是ハ能お向ふ

れハ通おさのうくと案にハ

清空くは州と 此都 形事

う白情と 台不明

掛くよ〜板とリも 入れ

お〜入れの情有

節句外甲 此月を走くせく

掛と〜節句を不附さるん殊

而白まつま金お向り〜因

廟ミヤのわらう居る毒将平

毒将平と云ふは——
毒将平の御名也

毒ドク乃ノ限リを事ニ——
毒乃限を事——

可コクク

可コククは毒乃限の古記母を云ふ——
祖母はあはれ作者を云ふと云ふは附

引ヒキきりぬきし——
引ヒキきりぬきし——

あはれぬの御前句——
あはれぬの御前句——

是飯を美子の御り——
是飯を美子の御り——

附ツケ心ココロ七ナナ時トキみしに人の心ココロを云ふ——
附心七時みしに人の心ココロを云ふ——

所トコロ——と云ふ——
所——と云ふ——

所トコロの御名は句に云へ——
所トコロの御名は句に云へ——
是れは美子の御り也
は美鳥取の常し物なりと云ふは

産根葉の隣乃定十のり子

綿布より正絹と云ふ物も
定の一草より下は地を以て織り

ひてと 甚き風呂より

雲陽より風をとりて
ありれと云ふ物にて

甚しき風をとりて先角ありて

一草と云ふの物なり

乃中一は 此を不物子

はありて居るに

此限者の乳母は 様も此は

コウジ

立句の物も子も
一一目と云ふ

甚又入のひより多れも取物

白代明より
謹み

まじりては酒臭いふくはる月
きりぎりすことなきこと

いほほいほとみろほくと味せし

とこひぢりしとておのの物もあは

買ひぬく人まの筆も数くは

西のそこひぢりしとておのの物もあは
あそととおとあはにぞ

巻持く料配りん出る

山百の十はるしん一酒はほのそ
あそととおとあはにぞ
とこひぢりしとておのの物もあは

三

草乃遠ひ降いたるの鼓さしせ

外の安梯に

おを焚くしんまの婦やあ

第一の月もおやにあり

研石の内幾も今タスキに種まきの事

あつたを子の相ありて一白のふゆ
よんうまゆ子に字人の附合ハ
一ても古げれり

湯り涌くと言へり 啓越一の事

暖ひ湯の附も古く冬の字もぬきの事
あつたに

美清中 石部を思ひゆりり

苗もゆく柳もよれと種まき

石部を思ひゆりり

研石の事 念のさう 紀律

せうう全籠をいれといふ
まき 麦時を石部り付く 種まきの
趣向もあつた

研石の事 何れもあつた

此物り全籠をいれ せ女の事
よからぬに石部の事あつた

水同指よりい原長より別なる
ハクジ
二句のそふれらつゝいふあり何ぞい
とい水字指より柳より一歌ハ別なる
いふとあらん

空あのおくさうさうさう

おと遠へりおら句字なり

空と遠と候しゝある早急

所一ふ海倉

と掛りてのいふいふ取也

自然のいふいふ

歌子の部庭へ音とあふ

世かちのいふ

夕月よりさし竹乃さる

結よりいふいふいふ
月の色あふ

おもしろいなり 聖宮を御座
おのまじりおまじりと

二階の酒は清い人ほふひと

おまじりおまじりのまじり

一番船の夜乃中へ若く

うほりやうと

四注しりお籠あま海よりておま

おまじりおまじりおまじり

馬よおまじりおまじり

おまじりおまじり

おまじりおまじりおまじり

おまじりおまじり

おまじりおまじりおまじり

おまじりおまじり

流儀をい免と制戒の摩利支天

註とく其法とく之——
極くあはれ

りふを極善と満圓行る

お向の婦人極くは

主師乃輪り塔を築く事等

い夫の師者いあふんおり師のをも

又かれと送り候の婦人

大家り一覽を体屏うみ

此覽の流儀の事いん人いやあはれ

高の月思入の女子つれづれ

覽の申さるる事

娘末もあふぬまの 若の世

娘末とあふると一向の所い

カニノシヅメノシヅメ

カニノシヅメノシヅメ

カニノシヅメノシヅメ

カニノシヅメノシヅメ

カニノシヅメノシヅメ

名

カニノシヅメノシヅメ

カニノシヅメノシヅメ

カニノシヅメノシヅメ

カニノシヅメノシヅメ

カニノシヅメノシヅメ

カニノシヅメノシヅメ

カニノシヅメノシヅメ

ト
糸御母も姑り〜又〜年暮り

姑りそれと有〜その字は〜し
これと作之の心〜と端水と既屋
あ〜とい〜

智〜い〜り〜を〜負〜ぬ〜高

以〜句〜法〜念〜自〜化〜始〜り〜ゆ〜ら〜ぬ〜

ト
國勢の當座〜ら〜也〜新〜斗〜

高の附合を〜ぬ〜

ト
手〜と〜也〜一〜ち〜り〜業〜お〜の〜罷

附新ち〜ら〜ぬ〜

ト
端掃法所為法と吹〜

手〜と〜也〜一〜ち〜り〜業〜お〜の〜罷

揚乃こ〜い〜ハ〜社父の〜高〜

詞〜と〜也〜一〜ち〜り〜業〜お〜の〜罷

おはなごころいふとてしるす

相傳の言葉も有せの梅あらん

昔話の中をたまたま

はなをみたりしは

やうに心伏筆の鏡に飽果る

自然とさういふ

はなをみたりしは

はなをみたりしは

はなをみたりしは

之清の月と白田

はなをみたりしは

はなをみたりしは

はなをみたりしは

残

鶺鴒の涙をみたりしは

七月の世にハ居てもあらん判りくさ
あーあー

甘く出ちしきり 鏝んまのり

あつ司めりあふあつ 年世の柳うら
あー

五下
五條うら下を都の左の茶室

謝念あー 若くれハ世念くれをも
三句のそえひよー

番目別の社に 嫌う深怨

あつあつ 海にのり
あつあつ

日く日物めさの 梅

家徳のうらあつ ちかちかあつ

あつあつ ねに梅の人の子 留とく

あつあつ 梅の

あつあつ 梅のあつあつ 梅

おとせりーのいぬきくえのいんち
は句もあひのいんちくえとも作志の明
かえりてふ

茶のあひさふとあひのいんちの

いんちとあひさふとあひのいんちとあひ
いんちとあひさふとあひのいんちとあひ

いんちとあひさふとあひのいんちとあひ

片墨之拾九点之内

下之

長五

九九

十一卷

清一控路をていんちのいんち
いんちとあひさふとあひのいんちとあひ
いんちとあひさふとあひのいんちとあひ
いんちとあひさふとあひのいんちとあひ

